

装丁家が綴る本への限りない愛着

衝撃的な昨年の電子書籍の登場。専用の電子端末での読む電子書籍は、本の重量からの解放など利便性、省資源性ははじめ、絶版本再生の機会、出版そのものの自体の可能性拡大等等、時代の流れだというが、著者は「『コンテンツ(情報内容)さえあればいい、それ以外の要素は不要』という発想だ。栄養剤やサプリメントを食事に代えるようなもの

ちよつと気になる

である。だが、読書は、本当にコンテンツを受容するだけの行為なのだろうか」と異を唱える。

著者は装丁家。装丁といえば、表紙、扉、カバーなどをデザインして本としての体裁をつくる仕事。装丁家である著者の「存在理由を根本から揺るがす」電子

新曜社
2520円

モノ 本は物である

桂川 潤著

書籍について、ことにそれが読書に及ぼす影響について「できるだけ冷静に考えてみた」のが本書であるという。

本は物である——というタイトルは、著者はじめ、本は「文章を盛る器」であり、「こころを込めてつくった料理は、見た目にも美しい手びねりの器でいただきたい」と同様「ある種の文章は、紙に印刷された本で読みたい」という人(三浦衛『出版は風まかせ』)、「本を手にする」という行為は一編のドラマだとの思いを抱く人、つまりは「物である本」に限りない愛着を抱いている人々による意思表示、主張でもあろう。

著者が手掛けた『吉村昭歴史小説集成』の製作過程が写真付きで追いかけられているのも貴重だ(今どき珍しい製函も)。名編集者にして装丁家の大先輩、田村義也らの本作りへの熱い思いも伝わってくる。

(ジャーナリスト)

小島直樹

本は物である

装丁という仕事



桂川 潤

5